



発行 社団法人 日本品質管理学会  
 東京都杉並区高円寺南1-2-1 (財)日本科学技術連盟東高円寺ビル内  
 電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507  
 ホームページ:www.jsqc.org/

## CONTENTS

- 1-トピックス ソフトウェア部会「遺言プロジェクト」完了と成果公表について
- 2-私の提言 マネジメントの質向上へ
- 2-ルポルターージュ ISQFDルポ
- 3-第39年度事業計画/10月の入会者紹介
- 4-研究助成募集のお知らせ/行事案内/新規研究会募集

## ソフトウェア部会「遺言プロジェクト」完了と成果公表について

ソフトウェア部会 部会長 兼子 毅

### 「他社事例から学ぶ」ことの難しさ

JSQCニュースNo.290のトピックス「ソフトウェア部会の活動が目指しているもの」でご紹介した、ソフトウェア部会の「遺言プロジェクト」がようやく完了した。学術誌に掲載された論文、国内外のシンポジウムなどの予稿など、何らかの形で「形式知化」された改善事例や分析事例を集め、それらの事例が持っている値打ちを再検討した活動の集大成である。

いつ、誰の言葉なのかも確かな記憶がないのだが、「賢くなければ他社事例から学ぶことはできない」というせりふを聞いたことがある。「人間が犬に嘸み付くと記事になる」という言葉もあるが、事例で報告される内容は「自分たちにとって新しい試みや経験」が中心となり、「自分たちにとって当たり前前」は書かれない。これは、現場に根付いた事実に基づく報告がもつ、根本的な制約なのだと思う。聞き手が、このような制約のある情報から、有用な何かを取り出すには、「自分たちにとって当たり前」であるがゆえに語られなかった何かを推し量らなければならない。この部分が、極めて困難で、豊富な知見と経験、好奇心が必要となるのであろう。

今回の「遺言プロジェクト」では、産が提供してくれた事例に対し、学や、他の産のメンバーから、「そもそもなんでそれを思いついたの？」など、第三者から見たストーリーの再構築がな

された。事例を提供したメンバーは、「なぜそのようなことを聞かれるのだろうか」という驚きすらあったのではないだろうか？ そのような議論を通じて、何が本質的で、何が重要か、ということが浮き彫りにされてきた。この「遺言プロジェクト」は、事例から学ぶための新しい方法論を提供した、と自負している。

### 「遺言プロジェクト」全体の遺言

このプロジェクトを通じて、問題解決に必要な王道が見えてきた。問題が起きているかどうかを知るためには、継続的に「測る」。管理指標の異常は、問題の発生を教えてくれる。しかし、どのような問題が起きているか、を管理指標は教えてくれない。その答えは「現場」にしかない。現場に赴き、現場の声を聞き、現場の隅々まで観察する。そこから、問題が見えてくる。その問題を解決するためには、頭を振り絞って、持っている知識と経験を総動員して、「考える」。そこから問題解決の糸口が見えてくる。

至極当たり前前のことを言っているように聞こえるかもしれない。しかしながら、「遺言プロジェクト」を通じて痛感したのは、今の品質管理が「考えなくなってきた」のではないかと、ということである。欧米流フレームワークで語られていることの実体は、「品質の分野で成果を挙げている企業の活動を調べてみたら、押しなべてこ

のようなことをしていた」というリストに過ぎない。それらの企業は、地道な品質管理活動を通じて、様々な試行錯誤の末、今の姿に至ったのである。喩えて言えば、鬼が考えに考え抜いて、自らに最適な武器、金棒を開発した、ということだ。金棒は、極めて重量が重く、扱いにくい武器である。金棒が効果を発揮するためには、絶え間ない筋力トレーニングが必要だ。基礎体力もなく、トレーニングも怠っている素人が、金棒だけを入手しても、相手を倒すどころか、その重量で自分がつぶされてしまう。現在の日本の品質管理は、まさに、金棒に押しつぶされたひ弱な人間の姿に見えて仕方がないのだ。

### 「遺言プロジェクト」成果の公表

「遺言プロジェクト」に区切りをつけるため、不完全ではあるかもしれないが、今までの検討成果をまとめて公表することにした。まずは、JSQCのWebページを通じて、電子的な形で、無料で公表する。多くの人に見ていただき、ご意見を賜るとともに、何かの役に立てていただきたいと考えてのことである。その際、「せっかくだから、本にしてみないか」という話になった。もともと出版を考えた活動ではないが、3社が興味を持ってきている。もし、めでたく出版の運びとなったら、別途何らかの手段でお知らせしたい。印税は、部会メンバーの忘年会費用に当てようか、と目論んでいる。

## ● 私 の 提 言 ●

## マネジメントの質向上へ

(財)日本適合性認定協会 井口 新一



パティシエの話

3、4年前だったか、日本人パティシエの番組がテレビで放映されていた。その

パティシエが、パリの著名なパティスリーの店先に並ぶ洋生菓子を眺め、この店には特別なレシピがあるのだろうと修行に入ってみたところ、ありふれたレシピであったという。曰く「味を飛躍的に高めるための裏技などない。地味な作業を、手を抜かずにやること。あたり前の事が一番難しい」

世界から注目され賞賛を浴びる洋生菓子作りには、勿論味を描くという創造的な活動が不可欠である。しかし、

それを実現する技は、一つ一つの食材の確認から始まって、指定された作業を、指示された温度と保持時間を厳密に守って行った結果であるという。このパティシエの仕事のなかに、品質管理と共通の意識があることを知って大いに驚いた。

## マネジメントの質

現代は、多くの情報が容易に手に入り、品質管理もパソコンの助けを借りてずいぶんと安易に高度な管理が可能となった。しかし、このことが品質と品質管理に向き合う姿勢を「上手くこなす」という方向に押し流していないだろうか。

標準化は、みんなが知っている作業を紙に記録することではなく、現時点でのベスト・プラクティスを、関係す

る人々が共通認識できるようにすること。そして、この標準は、作業する全員が確実に実施できるようにすること。この標準作業の徹底の度合いが、次の品質改善の成否に大きく影響する。これらの事柄は、ことさら目新しいことではない。しかし、これまでの標準化とその徹底の方法論は、グローバル化が広がる現在の環境にあっては再構築する必要にせまられてきている。すなわち、生活環境、労働意識、文化的背景、使用言語など様々な影響要因を充分考慮しながら標準化とその徹底を行わなければならないからである。この課題を乗り越えるためには、ものの品質管理と同時にマネジメント（仕事を進める仕組み）の質の向上の検討も欠かせない。ものの品質管理とその業務執行の枠組みとしてのマネジメントの質。我々にとっては、特にマネジメントの質を向上させることを、地道に、手を抜かずにいき、ものの品質管理を盤石にしていかなければならないのではないだろうか。

## ISQFD2009ルポ

吉川 雅修 (山梨大学)

第15回品質機能展開国際シンポジウム (ISQFD 2009) が、2009年10月22日と23日の両日、メキシコ合衆国ヌエボ・レオン州モンテレー市で開催された。同市での開催は2004年に続き2度目である。日米に続きISQFDを複数回開催した国となるメキシコの組織委員会の意気は高かったが、運悪く新型インフルエンザ問題の影響を受けた。所属組織から渡航を止められるなどで参加を断念した者がおり、参加者は約50人、論文発表件数は12件と、例年に比べて小規模となった。日本からの参加者も2組織計4名だけだった。さらに残念なことに赤尾洋二先生が都合で出席できず、ビデオレターのみの参加であった。

初日午前中はGlenn Mazur氏 (アメリカ) による『方針管理』チュートリアルセッションで、今回は途中でワークショップが実施された。「効果的な休暇戦略」がテーマとして与えられ。会場は6グループほどに分かれてミッションの設定からSWOT分析までの過

程をステップごとに発表しながら進めた。グループでの活動は、様々な国から集まった参加者間の交流にも一役買った。

初日午後には、今回の赤尾賞受章者となったWolfram Pietsch氏 (ドイツ) の発表 'Ethical Product Management employing QFD' に続いて4件の論文発表が行われ、2日目はブランド選択に関する基調講演 'Why we drink beer' の後、7件の論文発表が行われた。発表論文の分野またはキーワードを列挙すると、グローバル化と文化差異、組織戦略とFuzzy Front End、サービス品質保証とビジュアルマニュアル、自動車生産とTRIZ、ソフトウェアプロダクト・ポートフォリオマネジメント、客室稼働率の向上、QFDの学習システム、Six Sigmaとの統合、バルク材料開発とDFSS、そして産業訓練カリキュラムとなる。

次回のISQFDは2010年9月22～23日に米国のポートランドで開催される予定である。

## (社)日本品質管理学会 第39年度事業計画

行事 / 月		H21 10月	11月	12月	H22 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
年次大会・通常総会		第39回 30-31(土) 大阪大学												第40回 30日(土) 成城大学
研究発表会	本部								第92回 29(土)-30(日)					
	中部										第93回			
	関西												第94回	
講演会								第106回 (本部)	第108回 (中部) 第109回 (関西)					
ヤングサマーセミナー												第18回		
シンポジウム				第130回 (本部) 11日(金) ・中部医療 13日(日)	第131回 (本部) 30日(土)						第132回 (中部) 第133回 (関西)		第134回 (本部)	
事業所見学会	本部						第346回	第349回		第351回				
	中部						第347回			第350回				
	関西						第348回			第352回				
クオリティパブ					第67回		第68回		第69回		第70回		第71回	
その他の行事										第26回 FMES シンポジウム	関西支部 20周年 記念行事			8ANQ デリー(インド) 18-22
会合 / 月		H21 10月	11月	12月	H22 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
理事会		377回 19日(月)		378回 7日(月)	379回 27日(水)		380回 11日(木)		381回 21日(金)		382回 12日(月)		383回	384回
庶務・会員サービス・規定・会計・広報 合同委員会		13日(火)		1日(火)	20日(水)		4日(木)		14日(金)					
論文誌編集委員会		2日(金)	16日(月)	15日(火)	18日(月)	18日(木)	18日(木)	20日(火)	20日(木)	23日(水)	29日(木)	30日(月)		5日(火)
学会誌編集委員会		16日(金)	—	—	8日(金)	22日(月)	15日(月)							
事業委員会		6日(火)	—											

※論文投稿は委員会の開催10日前までをお願いいたします。直前の投稿では審査開始が遅れることがあります。

### 2009年10月の入会者紹介

2009年10月19日の理事会において、下記の通り正会員26名、準会員4名、賛助会員1社の入会が承認されました。

.....  
**(正会員26名)** ○内木 俊示 (飛泉)  
 ○勝田 正弘・茶園 広一 (太陽誘電)  
 ○大村 敬 (ヤマハ) ○小山 裕二 (マネジメントシステム評価センター)  
 ○飯田 隆文 (ナガセケム

テックス) ○中川 晋 (パナソニック)  
 ○竹岡 誠 (富士電機システムズ)  
 ○奥名 健二 (日立製作所) ○八森 重夫 (中央商事) ○人見 聡一 (田中貴金属) ○小林 靖之 (三菱重工業)  
 ○高橋 鉄次 (平安製作所) ○伊勢村 浩司 (ヤンマー) ○渡辺 勝典・野田 宗利・井上 純矢 (豊田合成) ○上原 茂男 (竹中工務店)  
 ○長谷川 敏紀・小木曾 龍也・栗本 清次・梅野 伸雄・早川 万寿男 (豊田自動織機) ○鮎沼 紳一郎 (日本ケミコン) ○長沢 伸也 (早稲

田大学ビジネススクール) ○田中 義高 (アイコム)

.....  
**(準会員4名)** ○高橋 貴重・内藤 貴浩・佐藤 奏 (青山学院大学) ○山下 哲朗 (名古屋工業大学)

.....  
**(賛助会員1社1口)** ○ウェブレッジ

.....  
**正 会 員:2557名**  
**準 会 員:96名**  
**賛助会員:161社185口**  
**公共会員:24口**

## 事務局からのお知らせ

(社)日本品質管理学会30周年記念事業  
第39年度研究助成募集要項

## 1. 趣 旨

21世紀を担う若手研究者や海外からの留学生に対し、その研究活動をサポートすることを目的とします。個人の研究への助成はもちろん、同じようなテーマを抱えた少数の若手研究者の研究集会への助成、海外の若手研究者の招聘への助成なども含みます。

2. 助成金額：1件10万円 5件以内

3. 期 間：1年間（第39年度：平成21年10月から平成22年9月）

## 4. 募集の対象

選考時に申請者が(社)日本品質管理学会の正会員もしくは準会員であり、次のいずれかの条件を満たす者とします。なお、本研究助成を過去2回採択されたことがある場合は対象から除外します。また、(2)の条件を満たす者については選考時に考慮をいたします。

- (1)申請時に35歳以下であり、大学、研究所、研究機関、教育機関等において研究活動に従事する者。
- (2)申請時に日本の大学院に在籍する外国籍の留学生（年齢制約はありません）。
- (3)申請時に35歳以下であり、海外の大学、研究所、研究機関、教育機関等において品質管理についての研究活動に従事する者で(社)日本品質管理学会の主催する諸行事、または品質管理に関連する研究集会に参加しようとする者。ただし、申請は招聘者が行うこととします。

## 5. 助成対象

品質管理に関連した研究を対象とします。

## 6. その他の申請条件

- (1)報告書は年度内に提出してください。
- (2)研究成果を当学会誌へ投稿、あるいは研究発表会などで発表することを奨励します。
- (3)学生が申請をする場合、申請時に指導教官・指導教員の所見を必要とします。

## 7. 申請の方法

所定の「(社)日本品質管理学会 研究助成交付申請書」を用いてください。申請書の様式は学会ホームページ（トップページ→お知らせ→理事会からのお知らせ）を参照し、メールに申請書を添付してください。

8. 募集期間：平成21年12月～平成22年3月末日

## 9. 選考方法

(社)日本品質管理学会研究助成委員会が審査選考を行います。

## 10. 決定通知

平成22年4月中に通知します。

## 11. 申請書提出先

(社)日本品質管理学会 本部事務局  
〒166-0003 東京都杉並区高円寺南1-2-1  
TEL 03-5378-1506 FAX 03-5378-1507  
E-mail: office@jsqc.org

## 行事案内

## ●第131回シンポジウム（本部）

テーマ：「品質保証の方法論とその実践」  
—「新版 品質保証ガイドブック」出版記念シンポジウム—

日 時：2010年1月30日(土)9:30～17:00

会 場：日本科学技術連盟

東高円寺ビル 2階講堂

定 員：150名

参加費：会 員 5,000円(締切後 5,500円)

非会員10,000円(締切後10,500円)

準会員 2,500円 一般学生3,500円

申込締切：1月22日(金)

プログラム：

基調講演

「企業経営における品質保証の役割」

大沼邦彦氏

(日立オートモティブシステムズ(株))

「品質保証の基本」

中條武志氏 (中央大学)

「プロセス別の品質保証」

大藤 正氏 (玉川大学)

「品質保証のための要素技術」

山田 秀氏 (筑波大学)

「主要産業分野における品質保証」

光藤義郎氏 (JUKI(株))

「自動車分野における品質保証の実践例」

大久保隆夫氏 (日産車体(株))

「家庭電器製品分野における品質保証

## 新規研究会を受け付けます

研究開発委員会では、本年度に設置する新規公募研究会の申請を受け付けます。奮って申請してください。特に、若手会員を主査とする研究会を歓迎いたします。

研究期間：2010年4月～2011年3月（1年間）

申請方法：「新規研究会設置申請書」（様式204-1）をホームページよりダウンロードし、ご記入の上、郵送で本部事務局宛にお送りください。  
[http://www.jsqc.org/ja/oshirase/kenkyuukai\\_shinki.html](http://www.jsqc.org/ja/oshirase/kenkyuukai_shinki.html)

申込締切：2010年2月19日(金)必着

## 研究会の申請と運営：

- 研究会の申請にあたり、申請者は共同研究者（学界・産業界）を5～10人位事前に働きかけて集め、申請書に記入する。理事会承認後JSQCニュースでメンバーを公募する。
- 研究目的と年間の研究活動計画を作成する。
- 1研究会のメンバーは20人までとする。
- 会場は原則として日本科学技術連盟東高円寺ビル会議室を利用する。
- 時間は18時～20時とし、食事を支給する。ただし、会場の都合がつけば午後でも可とする。
- 研究会運営費は一人1回当たり1,150円(内訳：通信費・資料代・食事代)。ただし、年間開催数は11回を限度とする。

の実践例」

林元日古氏 (シャープ(株))

「鉄鋼分野における品質保証の実践例」

本田知己氏 (新日本製鐵(株))

「航空輸送分野における品質保証の実践例」

小堀寿亮氏 (全日本空輸(株))

パネルディスカッション

申込方法：

11月送付の参加申込書にご記入の上、

本部事務局までお申し込みください。  
ホームページからも申し込みできます。  
<http://www.jsqc.org/q/news/events-list.html>

行 事 申 込 先

JSQCホームページ：[www.jsqc.org/](http://www.jsqc.org/)

本 部：TEL 03-5378-1506

FAX 03-5378-1507

E-mail: apply@jsqc.org